

全労済協会 中央大学法学部公開講座

「福祉と雇用のまちづくり

～誰もが働き暮らし続けることができるまちづくりへ～

第12回 2022年7月6日

「若者と女性の困窮と新しい支援のかたち

～居場所づくりから始まる個別支援／地域づくりへの循環を作る」

NPO 法人パノラマ理事

認定 NPO 法人フリースペースたまりば理事・事務局次長 鈴木晶子 氏

■求められる、「居場所」と「つながり」

大学院在学中の2002年、家庭教師として始めたひきこもりの若者支援がきっかけとなり、私は“居場所づくり”に関わるようになりました。その後、国内外の様々な NPO 法人での支援活動、新規支援団体設立への参画などを経て、現在は NPO 法人パノラマと認定 NPO 法人フリースペースたまりば（以下、「たまりば」）を中心に、神奈川県を拠点とした生活困窮者への居場所づくり、食支援、相談支援、地域づくりに日々取り組んでいます。

本日の講座では、私がこれまでの支援活動で培った経験、そして、パノラマや「たまりば」での活動事例をご紹介します。「若者と女性の困窮」について、みなさんと共に考える時間となれば幸いです。

「学費や生活に困っていても、支援機関の窓口で相談できないでいる若者」や「街を歩いている、ごく普通の女性が、実は生活に困窮し、風俗業で生計を立てているシングルマザーだった」など、私たちの周りには、支援を必要としているにも関わらず、社会の中で“見えない存在”になりつつある若者や女性が数多く存在しているのが現実です。その背景にある要因として、「居場所」がないこと、そして、他者との「つながり」を持ちにくい状況にあることが挙げられます。さらに昨今のコロナ禍が、そうした状況に拍車をかけています。

■「アウトリーチ」に基づいた支援活動の実践

若者支援機関などが15歳から39歳までを支援・相談の対象としているにも関わらず、家庭の事情や高校中退などにより無職となり、困窮するリスクの高い10代後半の若者が機関や窓口を訪れることはほとんどありません。何故でしょうか。それは、若者の特徴である「『機関』『窓口』ではなく『人』につながる」、「困っていること（貧困の状態化）を言語化しにくい」、「魅力がないと寄ってこない」、さらに「何かをしてもらい、聞いてもらう」といった“支援臭”を忌避する傾向と強く関係しています。また、女性の場合、DVなどを受けた際、相談窓口を数回訪れてはみたものの、予期せぬ対応に傷つき、「もう、二度と行きたくない」という思いをされた方が多いのも実情です。

このように、既に支援機関や相談窓口が設けられているにも関わらず、“つながりにくい人たち”に対して有効となるのが、「アウトリーチ」という手法です。具体的には、①“つながりにくい人”には会いに行くこと、②「つながりたいと思える、“支援臭”のしない自分であること」、③「行

ってみたいと思える“カラフルな場”を作ること」で、この3つを中心に据えた支援活動をパノラマでは実践しています。

■「シリンダー型支援」から「フラスコ型支援」へ

困窮者支援において、私たちが大切にしているのが「フラスコ型支援」という考え方です。従来の「シリンダー型支援」は課題解決に特化した「個別支援中心型」のアプローチで、支援メニューに基づいてプランを作成し、モニタリングしながら当初に想定・契約された支援内容を展開していくものです。つまり、支援計画から“ブレない、想定・測定可能な成果”が求められます。

これに対して、「フラスコ型支援」は主体性に基づく「居場所型」となります。そのため、“当初は想定していなかった成果”も含めて見ていきます。課題解決に必要な「個別支援」以外にも、「集団」や「地域支援共存」などの外部からの要素を加味することで強みを伸ばして行くハイブリッドな支援アプローチでもあります。また、支援活動の中に、支援者やボランティアスタッフなどの“善玉菌”を投入・攪拌することで生じる化学反応により、新たな「偶発性と創造性の苗床」としての役割も担います。

■将来的な「制度化」も視野に入れた支援活動の数々

最後に、「たまりば」が自主事業として運営する各事業についてご紹介します。

「たまりば」では、1991年から不登校児童生徒やひきこもり傾向にある若者たち、様々な障がいのある人たちと共に地域で育ちあう場づくりを続けてきました。

活動としては、①『川崎市子ども夢パーク』『フリースペースえん』の運営、②生活保護家庭・ひとり親家庭の中学生を対象とした「学習支援・居場所づくり」事業、③市内3か所の児童相談所で大学生と子ども・若者のマッチングおよびグループ活動（ふれあい心の友）、④川崎若者就労・生活自立支援センター「ブリュッケ」の運営（生活保護受給・生活困窮世帯等のひきこもり支援）、⑤コミュニティ・スペース「えんくる」でのフードパントリー開設と「えんくる食堂」、「こども☆きっさ」等の実施をしていますが、いずれも人と人がつながり、子どもたち、若者たち、地域の人たちが生きやすいまちづくり（地域づくり）の拠点となることを目指しています。①の『川崎市子ども夢パーク』での活動については、映画監督の重絵良樹氏が手がけたドキュメンタリー映画『ゆめパの時間』（2022年）として公開されることとなりました。

また、⑤コミュニティ・スペース「えんくる」では、川崎市民公益活動助成事業として「えんくる食堂」、「こども☆きっさ」、「チャレンジ・ラボ」を運営し、「節約・時短料理教室」、「相談支援事業」は独立行政法人福祉医療機構 WAM 助成事業として運営しています。

フードパントリーでは、「訪れる人＝貧しい人」という“スティグマ”を減らすのみならず、一般の地域住民も巻き込んだ“食品ロスを減らす場”として機能しています。「節約・時短料理教室」では、小竹貴子氏（『クックパッド』初代編集長、農林水産省食育推進会議専門委員）にご協力いただき、困窮世帯の女性や若者が料理のスキルを身につけることによる節約を促しています。

残念ながら現時点では、こうした私たちの取り組みは国の制度化までには至っておりませんが、引き続き、生活困窮者にとって大切な“居場所づくり”に今後も尽力していく所存です。

<文責：全労済協会調査研究部>